

「たった一つの想いと願い」

故白井順子さんに捧ぐ

2011年3月に起きた東日本大震災で大きな打撃を受けた旧ナスバ（愛島スポーツパーク）は閉鎖後、10年の時を経て変わり果てていた。その一角にある愛島テニスプラザというテニスコートも同様だった。人工芝の上には大量の苔が生え、人工芝は風に剥がされ基礎のアスファルトがむき出しになっていた。バックネットは木が生い茂り蔭が絡まっていた。

目を覆いたくなる光景に一際目を輝かせる人がいた。コロナ禍で思い通りの生活が出来ない中で、公共施設が使えず子供達の練習が思い通りに出来ずにいた白井さんは「これを直せたら、子供達が自由に練習できる場所が確保できるんですね」と。「子供達に夢を見させることが出来るんですね。」と呟いた。そこから「震災で失われた命は蘇らせることは出来ないが、施設は自分たちの手で蘇らせることが出来る。」を合い言葉に作業を開始した。

苔をスコップで取り除き、コート内の人工芝は手作業で剥がし、コート外の後ろの芝をコート内に移動して補修していった。気の遠くなるような作業が続いた。それは誰もが過酷な作業に一日を費やしていた。しかし、誰もが弱音を吐く事はなかった。むしろそこには笑顔があった。2020.6.3ついに実現、12面のテニスコートは十分に練習できるコートに蘇った。



この日から「このコートのように不可能を可能に出来ると信じて頑張ってみます」と中学生の息子と親子で二人三脚の練習が始まった。大人達に負けては泣きながら向かっていく息子を見て微笑むお母さんは幸せを感じていた。何故ならその時、癌が発症しており、すでに治療が困難な状態になっていた。お父さんはテニス経験がないにもかかわらず常に寄り添い練習に付き合っていた。思うようにボールコントロールが出来ないながらにボール出しをし、息子は一切文句は言わずに「試合と同じだ」と言いながら必死にボールを追っていた。傍らではゆっくりとボール拾いをするお母さんが見守っていた。理想の家族だった。

お母さんは中学校で活躍する息子を誰よりも喜んでいて。高校進学時も強豪校の東北高校に進学するときも通用するか心配していたが応援することを決めた。高校に進学すると「最下位番手なんです」と心配そうに話していた。「かつての先輩達も下位番手かインハイ2位、ハイジャバ2位になってる選手もいます。諦めず頑張っていれば全国で通用する選手になれます。日本一を目指しましょう」そう伝えると、「息子の可能性を信じてみます。」そう言って愛島の雲一つない空を見上げ、微笑んだ。

2025年息子はインターハイ団体2位、ハイスクールジャパンカップ第2位、国体第3位という素晴らしい結果を残した。その間、笑顔を絶やさずどんなに苦しくとも息子の可能性を信じて応援を続けた。子供の活躍に幸せを感じて。

2025年3月愛島テニスプラザは売却移転のため閉鎖になったが「想い」の残った人工芝は仙台市北部に位置する根白石にある自作コートに再利用し蘇らせることが出来た。

8月末のミニ国体の時「また、自由に練習できるコートで待っていますよ」そう言う「是非みんなで、また、バーベキューしたいですね。」そう言って静かに微笑んだ。

その約束は果たす事はなかった。3ヶ月後2025.11.26深夜2時、安らかに深い眠りについた。

誰よりも子供を愛し、家族を愛し、人を愛する姿勢に、多くの人が救われた。共に歩む親子の姿に本当に勇気を頂いた。

「これからも遠くから夢を持つ子供達を見守り下さい」「ありがとうございました。」

